

副詞を通して英語品詞体系を見直す

林 龍次郎

Re-examining the Word Class System of English through the Analysis of Adverbs—

This paper re-examines the traditional ideas of the word class system of English through the analysis of adverbs. First, I consider whether it is appropriate to treat traditional adverbs as a single category. I propose two word classes, focusers and degree words, which are distinguished from adverbs. These are function word categories, while adverbs are content words. Next, I examine the properties of the word *especially*, which I assume is a focuser but also seems to have properties as an adverb.

I argue that the distinction between content words and function words should play an important role in the understanding of the English word class system. I also show that each content word class has one or two function word classes which are closely related to it.

1. はじめに

本論では、英語の副詞を品詞分類の観点から考える。英語では副詞という品詞は雑多なものの集まりとされてきた。それはなぜか、まず伝統的な品詞分類の中で考える。そして、従来副詞とされてきた語の中で、特殊性が高い焦点化の副詞を考察し、これが副詞からは独立した語類であることを主張する。最後に、英語の品詞分類全般についての試論を提出する。

2. 英語の品詞分類

英語では伝統的には「8品詞」という考え方がなされてきた。学校文法で標準的とみなされる英語の品詞分類は次のようなものである。

[A] 名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞・前置詞・接続詞・間投詞（8品詞）（綿貫他2000・安藤2005）

この伝統的分類のバリエーション、あるいは伝統的分類を少し修正した分類に次のものがある。注目すべき品詞を筆者が下線で示した。

[B] Noun, Verb, Adjective, Determinative, Adverb, Preposition, Coordinator, Subordinator (Huddleston and Pullum 2005)

下線を施した語類は次のような単語を含む。

Determinative (Determiner = 限定詞) : *a, the, this, that, some, any, many, few*

Coordinator (等位接続詞) : *and, but, or*

Subordinator (従属接続詞, 補文標識) : *that, whether, if*

さらに、伝統的分類を少し修正した分類には次のようなものもある。やはり注目部分を下線で示した。

[C] Noun, Determinative, Adjective, Verb, Preposition, Adverb,

Conjunction, Interjection (Aarts 2011)

[D] 名詞・代名詞・冠詞・形容詞・動詞・副詞・助動詞・前置詞・接続詞・間投詞 (10品詞) (宮川・林編 2010)

間投詞 (interjection) を含めるかどうかという点は除いて考えると、重要なのは、「少し修正した分類」(B)(C)(D)に共通の特徴が、機能語 = 閉じた類 (closed class) の語類を独立させたり、より細かく分類しようとしたりしているということである。¹

すなわち、従来の分類の問題点として、内容語 = 開いた類 (open class) を機能語 = 閉じた類 (closed class) と区別するという観点が明確になっていないという点がある。

次に、生成文法に代表される現代の言語学の観点を考えてみたい。生成文法等の言語学ではあまり「分類」に重きを置かないが、「品詞」に相当する「統語範疇」は大体次のように考えられている

統語範疇 (syntactic categories)

- Major (lexical) categories (主要 (語彙) 範疇) = N, V, A, P, (Adv)
- Functional categories (機能範疇) = D, T, C, etc.

「統語範疇」はほぼ伝統文法の主要品詞に対応すると考えられるが、語の分類とみなした場合には次のような問題がある。

(a) Adv (副詞) の扱いが不明確である。語彙範疇はN, V, A, Pの4つとされることが多いが、Advはその5つ目のメンバーなのか。主に形態面からA (形容詞) と同一視する立場もありうるが、すべての副詞がそうとは考えられず、機能的にも明らかに異なっている。

(b) P (前置詞) は語彙範疇とってよいのか。

(c) T (Tense=時制) はもともと単語が入るとは限らず、D (Determiner=限定詞), C (Complementizer=補文標識) もゼロ形態になることが多い。

このことから、生成文法の分類はword classの分類としては疑問がある (あるいはそもそも包括的な分類を目指していない) と言える。「機能範疇」と伝統的な「機能語」は異なることに注意したい。

特に(a)で述べたAdvすなわち副詞について論じる必要がある。副詞という品詞は「雑多な語類」のように扱われることが従来多かった。たとえば現代において最大級の英文法書であるQuirk et al.(1985)は次のように述べている。

- (1) Because of its great heterogeneity, the adverb class is the most nebulous and puzzling of the traditional word classes. Indeed, it is tempting to say simply that the adverb is an item that does not fit the definitions for other word classes. As a consequence, some grammarians have removed certain types of items from the class entirely, and established several additional classes rather than retain these as subsets within a single adverb class.” (Quirk, et al. 1985)

ここでQuirk et al.が言うのは、副詞とは他のどの品詞の定義にも当てはまらない語を入れる異種混成の語類であり、一部は副詞から除いて他の独立した語類とすべきだという意見もあるということである。

副詞が雑多な語類のように扱われる理由は、それと縁のある機能語（閉じられた類に属する語）を別に扱っておらず、すべて副詞としている点にある。

上で見た「少し修正された分類」(B)(C)(D)において、副詞以外の範疇については、内容語から機能語を独立させている。名詞と代名詞は伝統的な分類においてすでに分けられていることがあるが、形容詞と限定詞、動詞と助動詞も現代的な文法では一般に分けて考えている。副詞に関してはその区別をしないできており、内容語と機能語が混在している。

本論では、暫定的に次の品詞分類を採用する。これは、上の「少し修正された分類」を参考にした上で、内容語と機能語の区分に重点を置いたものである。

- (2)

1. 名詞 (Noun)

2. 動詞 (Verb)
3. 形容詞 (Adjective)
4. 副詞 (Adverb)
(以上内容語)
5. 代名詞 (Pronoun)
6. 助動詞 (Auxiliary)
7. 限定詞 (Determiner/Determinative)
8. 焦点化詞 (Focuser)
9. 程度詞 (Degree word)
10. 前置詞 (Preposition)
11. 従属接続詞 (Subordinator/Subordinate Conjunction)
12. 等位接続詞 (Coordinator/Coordinate Conjunction)
(以上機能語)

以下では、内容語と機能語の弁別という観点を重視する方向で品詞の問題を考えていくことにしたい。次節では、問題の多い副詞という語類について検討する。特に、副詞の中に含まれる機能語を考えていく。

3. 副詞

副詞の伝統的な定義には次のようなものがある。

(3) 「動詞・形容詞・副詞または文全体を修飾する」(安藤)

(4) “A large word class containing items that are the heads of adverb phrases, e.g. *clearly is the head of very clearly in Philippa speaks very clearly*. They have adverbial function modifying adjectives (very clear, amazingly fast), verbs..., prepositional phrases, ... and other adverbs.” (Brown and Miller 2013)

(4) は「副詞句」の主要部をなすものが「副詞」であるという定義であり、

他の品詞と共通する定義であるが、同語反復のように受け取られる可能性がある。

- (5) “Adverbs are one of the four major word classes, along with nouns, verbs and adjectives. We use adverbs to add more information about a verb, an adjective, another adverb, a clause or a whole sentence and, less commonly, about a noun phrase.”
(Carter and McCarthy 2011)

副詞が他の品詞を修飾する（情報を付け足す）ものという定義である。副詞は動詞、形容詞、他の副詞、あるいは節・文を修飾し、時には名詞句も修飾する、という趣旨である。

- (6) “The main thing that makes the adverb category open is that such a high proportion of adverbs are morphologically derived from adjectives by adding the suffix *-ly*.” (Huddleston and Pullum 2005)

これは形態的な特徴であり、確かに当てはまるものは多いが、もちろんすべてではない。他の形態的な特徴として比較級・最上級の屈折変化があるが、形容詞と共通なので区別はできない。

一般には、上で挙げた定義にも見られるように、副詞は分布・機能上、「修飾語」あるいは「付加部」として働くものと考えられている。AP, PP, AdvPも修飾するものがあるが、主要なのはS修飾とVP修飾と考えてよい。²

- (7) a. He spoke clearly. (VP修飾)
 b. They attacked the gate courageously. (VP修飾)
 c. They completely finished the work. (VP修飾)
 d. Frankly, I don't like him. (S修飾)
 e. Probably they will come today. (S修飾)
 f. Unfortunately for me, I don't speak Spanish. (S修飾)
 g. I can't join you. Nevertheless, I appreciate your kindness. (S

修飾)

h. He stood right in front of me. (PP修飾)

i. Tom behaved incredibly stupidly. (AdvP修飾)

j. Mary is amazingly smart. (AP修飾)

上のいくつかの分類の疑問点として次のようなことがある。

(8) 副詞は「副詞句」の主要部に必ずなるのか。たとえばvery, quite, even, onlyなどは補部や付加部を取らないが副詞句の主要部となっているのか。

(9) even, only, aloneなどは副詞とされるが、これらが名詞句を修飾している場合についてはどう考えるか。副詞は名詞句も修飾するのか。

これらの解決策として、本論は次のことを主張していく。

(10) a. 副詞とは内容語であり、その機能は基本的にS修飾（文副詞）およびVP修飾(動詞句副詞)である。

b. very, quiteなどは程度詞という独立した語類である。

c. even, only, also, aloneなどは焦点化詞という独立した語類である。

d. 程度詞・焦点化詞は句を形成しない。補部, 指定部, 付加部などを取らない（それ自体が指定部, 付加部となる）。

e. 程度詞・焦点化詞は機能語（閉じた類）である

4. 焦点化詞 (focuser)

even, also, too, onlyなどは焦点化の副詞と呼ばれている。これらに関して、本節では次のことを主張する。

(11) 焦点化副詞は副詞ではなく、「焦点化詞」という独立した品詞である。これは機能語（閉じた類）である。焦点化詞は内容語である副詞と関係は深い別の品詞ということになる。

(12) 副詞—焦点化詞は、名詞—代名詞、形容詞—限定詞、動詞—助動詞と似た関係である。

(13) その語類の中でも性質が統一されない（各々の特異性が高い）のが機能語の特徴である。たとえば限定詞の分布（a(n), the, many, few, such）、助動詞の分布・形態（do, ought, dare）を考えてみるとよい。

Huddleston and Pullumによると、焦点化の副詞には次の3種類がある。本論の考え方では、これをそのまま3種類の焦点化詞と捉えることができる。

(14) a. (restrictive)

alone, but, exactly, just, merely, only, simply, solely, etc.

b. (partial restrictive)

especially, mainly, mostly, notably, particularly, etc.

c. (additive)

also, as well, too, even

(Huddleston and Pullum 2002)

本論では、各焦点化詞は(15)に示す5つの特徴のうち1つ以上を持っていると仮定する。いずれも焦点となる要素との位置関係に関するものである。下線部が焦点を表す。

(15)

(a)文中の焦点になる構成素の直前におかれる

Only a genius can do it.

We saw *even* a helicopter flying over us.

You might win, but *only* if you do your best.

It's cold here *even* in summer.

(b)文中の焦点になる構成素の直後におかれる

John *alone* can help us.

He, *too*, has never seen it before.

She reads academic papers *only*.

It's cold here in summer *even*.

(c)動詞句の最初において動詞句中の任意の要素を焦点にする

I will *only* greet Mary at school.

Linda will *even* sell her notebook to her friends.

(d)動詞句の最初において文中の任意の要素を焦点にする

John will *also* phone Mary at night.

(e)文の末尾において文中の任意の要素を焦点にする

Bill sang at the concert, *too*.

(f)接続詞的に使われ、直後の要素が焦点となる。

Mary looked sad, *even* depressed.

She likes tennis, *also* volleyball.

どの性質を持つかはそれぞれの焦点化詞の特異性である。たとえば(14)のHuddleston and Pullum(2002)の分類で同じグループに属していれば性質も同じということはない。同じadditiveに属するalsoとtooは明確に分布が異なり、上記5つの特徴のどれを持つかにおいても違いがある。

この中で、(c)(d)は、生じる位置としては一般的なVP副詞と共通であるが、(a)(b)(e)(f)の特徴はVP副詞にはない。また、生じる位置に違いはなくても、焦点化詞の中に(c)になるものと(d)になるものがあることに注意すべきである。

一般的な副詞と明らかに異なる分布を示すものの一つが「…だけ」を表すaloneである。aloneには上の(b)の特徴しかない。しかもこの語の場合、John alone can help us.のように主語の後に生じて主語を焦点とするものの、目的語の場合はそのようなことがない。次の例を参照。

(16) John can help Mary alone.

この文はaloneを「一人で、単独で」という意味の副詞としてしか解釈できず、焦点化詞としては容認不可能である。

このaloneは名詞を修飾するため形容詞だとする見方もある。しかし、

実際は名詞ではなく名詞句全体を焦点化するという点、必ず名詞句の後に置かれる点、固有名詞や人称代名詞にもつく点、叙述用法がない点（John is alone.は「一人で」の意味にしかない）などから、それは不適切である。このように「…だけ」を表すaloneは従来認定されているどの品詞の基本特徴も持たない、非常に特異な語と考えられる。

aloneはきわめて異例であるが、それ以外の焦点化詞も特異性は高い。only, even, too, alsoなど代表的な焦点化詞はそれぞれに異なる分布を持っている。

5. Especially

この節では especially という語について検討する。筆者の関わる『オーレックス英和辞典第2版』では103人の英語ネイティブスピーカーについて、especiallyの使い方（文中で現れる位置）を調査している。

(17)

Which of the following expressions do you use?

- | | |
|---|-----|
| (i) I like Japanese food very much. Especially , I like tempura. | 1% |
| (ii) I like Japanese food very much. I especially like tempura. | 83% |
| (iii) I like Japanese food very much. I like especially tempura. | 0% |
| (iv) I like Japanese food very much. I like tempura especially . | 26% |
| (v) None of the above | 16% |

（『オーレックス英和辞典第2版』 p. 629 PLANET BOARD）

示された5つの選択肢のうちどれを用いるかに対する回答率は上のとおりである（複数回答を可としている）。

まずespeciallyにはS修飾副詞としての性質(i)はない（上の調査では1名だけ使うとしているが）。一方、VP副詞の性質(ii)は持っており、上の例の場合目的語を焦点としている。しかし焦点となる要素の直前に起こること(iii)はない。焦点となる要素の直後に生じること(iv)はやや限られている。

上のどれも使わないという人は次の言い方がよいと答え、上の表現のどれかを使うと答えた人の中にも、このように一文で表すのが最もよいという人が少なくなかった。

(18) I like Japanese food very much, **especially** tempura.

especiallyは形態上-lyという接尾辞を持っており、VP修飾できることから、純然たる副詞であるという考え方もあろう。しかし、以下の点は一般的な副詞とは明らかに異なっている。

(I) I like Japanese food, especially tempura.が⁸(17i-iv)の4つの表現と比べてももっとも自然な表現と判断する母語話者が多い。これはJohn looked sad, even depressed. や She likes tennis, also volleyball.と同じで接続詞的用法であり、一般の動詞句副詞にはない用法である。たとえばVP副詞のcompletelyにおいては次の文は不可である。

(19) *John finished the homework, completely the composition.

つまりespeciallyは(15f)の性質を持つ。

(II) 下の例のようにNPの直後においてそれを焦点としうる。³

(20) I especially like tempura.

(21) I like tempura especially.

これは4節で述べたaloneと同じ用法で(15b)にあたるが、目的語にも後置できる点が異なる。

他に下のようなPP、従属節の修飾も可能であり、NPを含めた任意の句を修飾できる。つまり(15a)の性質を持つ。

(22) This film is difficult to understand, especially for Japanese people.

(23) You should keep quiet, especially when you are on the train.

especiallyはeven, onlyのようにいつも焦点となる語句の前に置かれるわけではない。目的語の前は不可。目的語を焦点とするときは動詞句の最初におく。これは(15c)の性質である。

これらのことから、especiallyは上の(15a,b,c,f)の分布を持つ焦点化詞

であると言える。

Huddleston and Pullum のあげるpartial restrictiveな焦点化の副詞(14b)に属する語も、ほぼespeciallyと共通した特徴を持つ。

ただ、それでも(c)の性質を持つならばそれはVP副詞の性質であるから、焦点化詞という別の品詞を立てずに副詞と見ることも可能なのではないかという意見もあろうと思われる。しかし、本論では、焦点化詞は副詞と関係が深い機能語であると考え。それはちょうど本論でいう「程度詞」と副詞の関係と同じである。

名詞について考えてみると、これは機能語である代名詞と明らかにつながりがある。

形容詞と限定詞も関係が深い。限定詞 (determinative, determiner) は、冠詞a, an, theや指示詞this, that, また数量詞some, anyが典型的なものであるが、数量詞のうちmany, fewなどは①比較級・最上級の形を持つ (more, most, fewer, fewest) ②veryなどの程度詞がつく③主に堅い文体においてであるが、叙述的用法を持つ (His mistakes were many [few].) など形容詞の性質を有する。

また、助動詞のうちで、進行形や受動態のbeおよび完了形のhaveは動詞と共通の形態を持つ。さらに、法助動詞のneed, dareは同じ意味で動詞としての用法があり、どちらとも決められないような場合もある。have to, used toについても両様の用法があり、準助動詞と呼ばれることもある。⁴

このように、内容語にはそれと関係の深い機能語があり、意味や用法などの性質が重なる場合がある。本来内容語である副詞に対するそのような機能語が焦点化詞と程度詞であるということになる。

6. 程度詞

ここで程度詞について少し説明を加えておく。上で焦点化詞について

述べたのと同様のことが程度詞にも当てはまる。典型的な程度詞はvery, quite, ratherなどであるが, (7i-j)のincrediblyやamazingly, またextremely, greatlyなども程度詞と考えられ, これらは形態的に-lyつまり副詞の特徴を持つ。つまりこれらは焦点化詞におけるespecially, mainlyなどと同様である。このように, 程度詞も焦点化詞と同じく, 副詞と深い関係のある機能語である。

7. 品詞分類試論

前節で, 各内容語と各機能語との間に関係性があることを論じてきた。下に(2)の暫定的な品詞分類を再掲する。

(24)

1. 名詞 (Noun)
2. 動詞 (Verb)
3. 形容詞 (Adjective)
4. 副詞 (Adverb)
(以上内容語)
5. 代名詞 (Pronoun)
6. 助動詞 (Auxiliary)
7. 限定詞 (Determiner/Determinative)
8. 焦点化詞 (Focuser)
9. 程度詞 (Degree word)
10. 前置詞 (Preposition)
11. 従属接続詞 (Subordinator/Subordinate Conjunction)
12. 等位接続詞 (Coordinator/Coordinate Conjunction)
(以上機能語)

1—5, 2—6, 3—7, 4—8, 4—9 という内容語—機能語の関係

性があることがこれまでの議論で示された。この5つのうち最初の3つについては伝統的な分類でも暗黙の裡に認められていたと思われるが、4つ目と5つ目すなわち副詞に関してはそれが認識されていなかったことを本稿では指摘してきた。

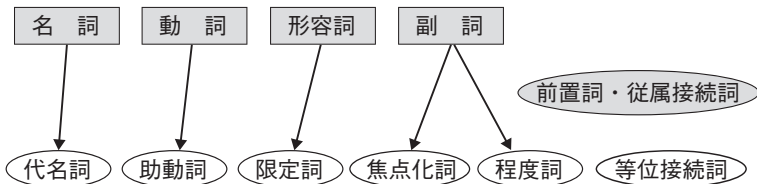
では、残る10～12の語類についてはいかに考えるのか。2節で述べたように、10の前置詞は一般的には機能語と言えるが、生成文法では語彙範疇とされる。11の従属接続詞にはwhen, if, because等およびthat, whether, if, forなど「補文標識 (complementizer)」が含まれるが、いずれもS (節) を補部としてとる。つまり句の主要部となり、PPやCPを形成する。したがって、10, 11はいずれも機能語であるが、主要部として句 (XP) を形成する語類である。⁵

12の等位接続詞はand, but, orが主な例であるが、特に関係する内容語もなく、主要部として句を形成するわけでもない語であるから、5～9とも10～11とも性質の異なる語類であり、機能語の中でも特別なタイプであると考えられる。

次節では以上で見たことを図式的に表すことを試みる。

8. 英語品詞の体系

(25)



長方形で囲んだ品詞が内容語 (開いた類), 楕円形で囲んだ品詞が機能語 (閉じた類) である。網掛けにした品詞が補部や付加部をとって句の主要部となるものである。→は前の節で論じた, 内容語と機能語の関係を表

している。

もちろん、一つの単語が複数の品詞に属するということはある。→でつながった内容語と機能語の間にもそれがあるのは上で見たとおりである。

9. まとめと残された問題

本論では、副詞が従来「寄せ集め」の品詞のように考えられてきたことの原因と、修正案を示した。そして、内容語と機能語、その2つの関係性という面から英語の品詞分類を見直してきた。最後に、残された問題についてふれる。

古い文献であるがFries(1952)による19種類の品詞分類があり、Brinton and Brinton (2010) もこれに言及している。この分類においては、たとえばnot, let's, yes, 存在を表すthereなど、他にそれと同じ性質を持った語がほとんど全くないと思われる語を、メンバーが一つだけの語類としているため、語類の数が非常に多くなっている。しかし、本稿ではそれらの孤立した語については、ある語類に属するとは考えず、きわめて特殊な機能語とみなすことにする。上で述べたようにもともと機能語は特異な性質をそれぞれが持っているが、その極端な場合である。⁶

また、oh, wow, wellなどの間投詞 (interjection) については、ここまでの議論では扱っていないが、一つの品詞とみなしてもよいとは考えている。間投詞には談話標識 (discourse marker) も含まれると考えられ、談話の観点から軽視できるものではないが、本論では立ち入らないことにする。

その他に、here, there, now, thenなどのダイクシスに関わる語や、いわゆる疑問詞や関係詞 (who, what, when, whereなど) の扱いが本論の枠組みではどうなるかというところも問題になるが、その議論は別の機会に譲る。

注

* 本論は、2016年11月26日（土）に聖心女子大学で開催された「第50回大学院英文学専攻協議会研究発表会」にて、「焦点化の副詞から英語品詞論へ」のタイトルで行った講演の内容に基づいたものである。

1. 代名詞については機能語と考えられるが、新しい分類の中にもこれを名詞と分けていないものがある。この点については本論では立ち入らない。
2. Quirk et al. (1985)はadjunct, conjunct, disjunct, subjunct という4つに分類している。
3. この2文はあいまいでVP修飾ともとれるが、ここでは名詞句の後におかれてそれを焦点とする場合を考えている。(20)は「特に私が…」の意味である。
4. 相助動詞と法助動詞を区別すべきとも言えるが、本論ではまとめて助動詞とする。
5. 従属接続詞は、ここでは論じないが「節を補部としてとる前置詞」とすることができるものである。また、give up, turn offのup, offなどの小辞 (particle) もここでは前置詞に含めて、「補部を取らない前置詞」とする。
6. Friesはdegree adverb (本論での程度詞) を一つの語類としているが、焦点化詞に相当するものは設けていない。

引用文献

Aarts, Bas (2011) *Oxford Modern English Grammar*. Oxford UP.

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社.

Brinton, Laurel, J. and Donna M. Brinton (2010) *The Linguistic Structure of Modern English*. John Benjamins.

林龍次郎

- Brown, Keith, and Jim Miller (2013) *The Cambridge Dictionary of Linguistics*. Cambridge UP.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy (2011) *English Grammar Today*. Cambridge UP.
- Fries, Charles Carpenter (1952) *The Structure of English: An Introduction to the Construction of English Sentences*. Harcourt Brace.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge UP.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge UP.
- 宮川幸久・林龍次郎（編）（2010）『要点明解アルファ英文法』研究社.
- 野村恵造・花本金吾・林龍次郎（編）（2013）『オーレックス英和辞典第2版』旺文社.
- Quirk, Randolph, et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Oxford UP.
- 綿貫陽 他（2000）『ロイヤル英文法』旺文社.